

藤原与一先生著

『方言の山野』

——ことばのさとをたずねて——』

方言は山野に生きている……方言の山野
を行つて ひたすらに日本語の生きて
はたらくすがたをとらえることにつと
めたい

右は、本書の扉に書かれた、著者、藤原与一
先生のおことばである。今までに公けにされ

た幾多の御著書・御論文は、すべて、右の精
神で貫かれたものであり、かつ、その結実
したものであった。

本書は、ひと口に言えば、「方言研究の生
活誌」である。先生の小学校低学年のころに
始まった方言への自覚（「はじめのはじめ」）

は、愛媛県師範学校、広島県高等師範学校時代にかけていよいよ深まり（「くに出で」）、やがて本格的な方言研究への旅が始まる。

（「全国深部調査にかかる」）

先生の、方言を山野に求める旅は、実に、四十余年、日本全国にわたっている。いな、世界に及んでいる（「世界ことばの旅」 昭和45年 朝日新聞社）とも言えようか。

本書には、その時と所の一ふし一ふしが、愛情のこもった筆致で、生き生きと語られている。

○：安来の町で「キ」の発音を：（「全国深部調査にかかる」）

○：ウエンソン先生のところまで：（九州方言の深みへ）

右の一節を御紹介してみよう。

○：三、四人の子どもが遊んでいましたので、近よつて、

「この辺に、学校の先生がいらつしゃいますか。」

と尋ねてみました。

「いる。」

という返事です。

「なんといい先生ですか。」と問いますと、

「ウエンソン……。」

と、男の子が答えてくれます。この姓の発音が、もはや、私には驚きの大隅弁でした。「上蘭」という姓が、「ウエンソン」と発音されたのを聞いただけでも、

もはや上気してしまつたのですから、あとは推して知るべしです。いよいよ方言の異域に來たなど、自分に言い聞かせました。（80～81頁）

○：巡查さんと宿屋：（北の国へ分け入る）

○：桑瀬の夜：（四国二題）

○：先生、去ネーノ：（近畿を歩く）

ここでも一ふし抜き出してみよう。

泊めてもらった宿の亭主が、当時十五歳の、まことに気つぷのいい人で、その「オトコギ」（男気）には、すっかり

感服させられました。宿についてまもなく、昼食になつたのですが、料理を持つて来てくれた主人が、

「ウチト オナジ ゴツツオヤデ ノ。」

（うちのと同じごちそうだからね。）

と言います。言うことに、すこしも飾り気がありません。……。

毎日、力づよい世話をしてくれた亭主は、なにかのついでには、

「センセーヨ。わしは コーユー オトコヤデ。」

と自己を語るのです。滞在期間、一週間のおわりが近づきますと、主人は、幾度となく、

「ジェンシエー モーイネー。」

と言うのです。これが、私どもへの哀惜の表現だったので。（244～247頁）

○：男まえにほればれれ：（中部地方一人生模様）

○：なにになにしてツカラ：（関東点描）

○：愛の方言学：（開拓の旅―研究開拓の旅、無限につづく旅―）

右に一部御紹介した小題目のもとの一篇一篇の文章は、「方言研究の生活誌」であると同時に、「研究随想」とでも呼ぶような

味わいがある。人と研究とが美しく融けあつた文章ほど、私どもの心を楽しませるものはない。（昭和48年4月刊 文化評論出版 定

価二二〇〇円）

（佐々木 峻）